

青梅市文化財ニュース

第 3 2 5 号

平成 2 6 年 1 1 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

青梅市内にある遺跡の現状 その 10

霞川に沿った遺跡は今まで第 2 5 1 号、2 8 3 号、2 9 3 号、3 0 3 号、3 1 3 号の 5 回にわたりご紹介してまいりました。今回は、霞川本流の最後として、左岸を埼玉県境までご紹介することといたします。

1 山根遺跡 やまねいせき 青梅市今井一丁目 1 7 0 番地付近を流れる沢の西側に位置し、現在では多くの住宅が建てられています。昭和 4 0 年代、この遺跡での表面採集で、縄文時代中期前半、後半の土器片や平安時代の須恵器や土師器などのかけらがみつかりました。そして、平成 6 年 8 月 1 9 日から一か月半にわたり、宅地開発に伴う発掘調査が行われ、平安時代に該当する水場の遺構がみつかりました。

発掘された旧河川には、交差させるように桜の木などを使った木道が発見され、西側には幅 4 0 cm から 8 0 cm の樋状遺構、そして多くの杭が見つかりました。

この木道や樋状遺構の周辺部では、泥炭層が広く分布し、自然流木や植物の種子のほか、平安時代の土師器や須恵器などがみつかりました。また、旧河川道付近では、加工痕が認められるへら状の木製品のほか、下駄や黒漆塗りの椀などが見つかりました。このことから、平安時代における小谷部に存在する水場遺構の状況を示す市内では貴重な発見例になっています。

2 天神平遺跡 てんじんだいらいせき 薬王寺の西方に位置し、天神平と呼ばれる尾根の先端がこの遺跡です。現在は草木が生い茂っているため、遺跡の状況は確認できません。

過去の記録では、縄文時代前期後半（5 千年位前）の諸磯式という様式の土器が見つ

3 城の腰遺跡 しろこしいせき この遺跡は、青梅市今井一丁目 4 7 5 番 1 付近に位置し、加治丘陵から南東方向へ伸びた台地で、南側は少し離れて霞川、北側はうしろ川（おしろ川）によって浸食された舌状台地上にあり、その最先端は今井城跡となっています。

最初の発掘調査は、昭和 6 1 年度、市道建設に伴う道路用地上の発掘調査として、幅 4. 5 5 m、長さ 2 6 0 m の範囲で行われました。その結果、ナイフ形石器を伴う石器集中地点 4 か所や礫群などが発掘され、旧石器時代の遺跡としての存在が認められるものとなりました。その後、小規模発掘を含め、1 0 回以上の調査が行われ、広範囲にわたる時代の遺跡であることが判明しました。

縄文時代の遺物としては縄文時代早期撚糸文、押型文土器片、前期の諸磯式、中期勝坂式、加曾利 E 式土器、古代では、平安時代の土師器や須恵器が発掘されました。石器では打製石斧や礫器、磨り石、石皿などの他、第五次調査では縄文時代中期後半の柄鏡形住居跡が発掘されました。この地域は台地の先端部に今井城跡があるため、それに関連する遺構も考え合せながらの調査が進められました。

現在、遺跡の東側は、ほとんどの範囲に住宅が立ち並び、西側も大規模宅地開発が進められていることにより、現在では目視による遺跡全体の把握は難しく、表面採集においても不可能となっています。

4 今井城遺跡 いまいじょういせき 城の腰遺跡の立地する舌状台地の先端に今井城跡があり、現在、青梅市の指定史跡として保全されています。南の霞川低地とこの台地との比高は約 6 m で、三か所の曲輪のほか、空堀や土塁などが現在でも確認できます。

昭和 4 1 年に最初の発掘調査が学習院大学輔仁会史学部により行われ、掘立柱建物跡、火葬墓、地下式杭などが発見されました。そして、土塁の地下には柱穴や土杭が見つかり、さらに、土橋の地下には箱堀が見られ、北西側の土塁地下では多数の板碑や宝篋印塔、骨臓器などが廃棄状態で見つかりました。この板碑に記載されていた年号は正和元（1312）年から大永二（1522）年にわたっており、それ以降に城の改築がなされたことを示すものとされ、城主においても新旧まったく異なる集団が入れ替わったのではないかという推測もされています。しかし、今井城に係わる古文書や金石文などで具体的な内容を記したものは現在でも発見されず、この城に関する歴史は不明となっています。

台地の西側に位置する城の腰遺跡の発掘調査では、長さ 1 2 m、幅約 7. 5 m に及ぶ大型住居状遺跡や堀なども新たに見つかり、城に係わる遺構からの全貌は徐々に明らかになってきています。

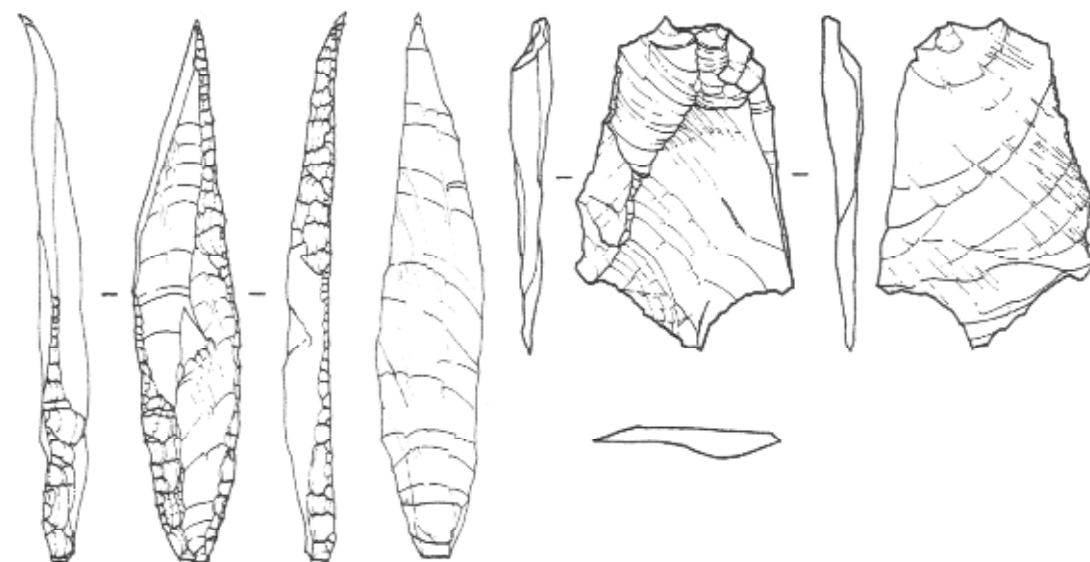
5 倭林遺跡 やまとばやしいせき 青梅市今井一丁目 5 2 1 番地付近にあり、埼玉県と青梅市を境とする沢の西側に位置しています。特別養護老人ホームの建設に伴う発掘調査が平成 8 年 5 月から 11 月まで行われ、約 7 千㎡の調査区域で、旧石器時代から縄文時代、古墳時代、平安時代、鎌倉～戦国時代にかけての遺物が発見されました。

旧石器時代ではナイフ形石器を伴う石器集中箇所が1か所発見され、縄文時代では諸磯b式期の集石遺構が3か所、古墳時代（7世紀半ば）の竪穴住居跡が一軒、平安時代では9世紀半ば～後半の住居跡1軒が見つかりました。

中世の遺構では、溝によって区画された内部に、掘立柱建物跡27棟、井戸3基、大型住居遺構1基など、多くの遺構が発見され、板碑や青磁、白磁、瀬戸天目椀、常滑鉢などが出土しました。このことは、中国大陸との交易や愛知県からの焼き物の交易範囲における存在を物語ることとなっています。また、これらの遺構や出土品から、南西側に位置する今井城との関連も十分考えられ、青梅市における鎌倉時代から室町時代におたる貴重な遺跡の発見となっています。

現在、広大な敷地には建物や駐車場が作られ、遺跡全体を見渡すことはできず、また、遺跡付近における遺物の表面採集も不可能となっています。

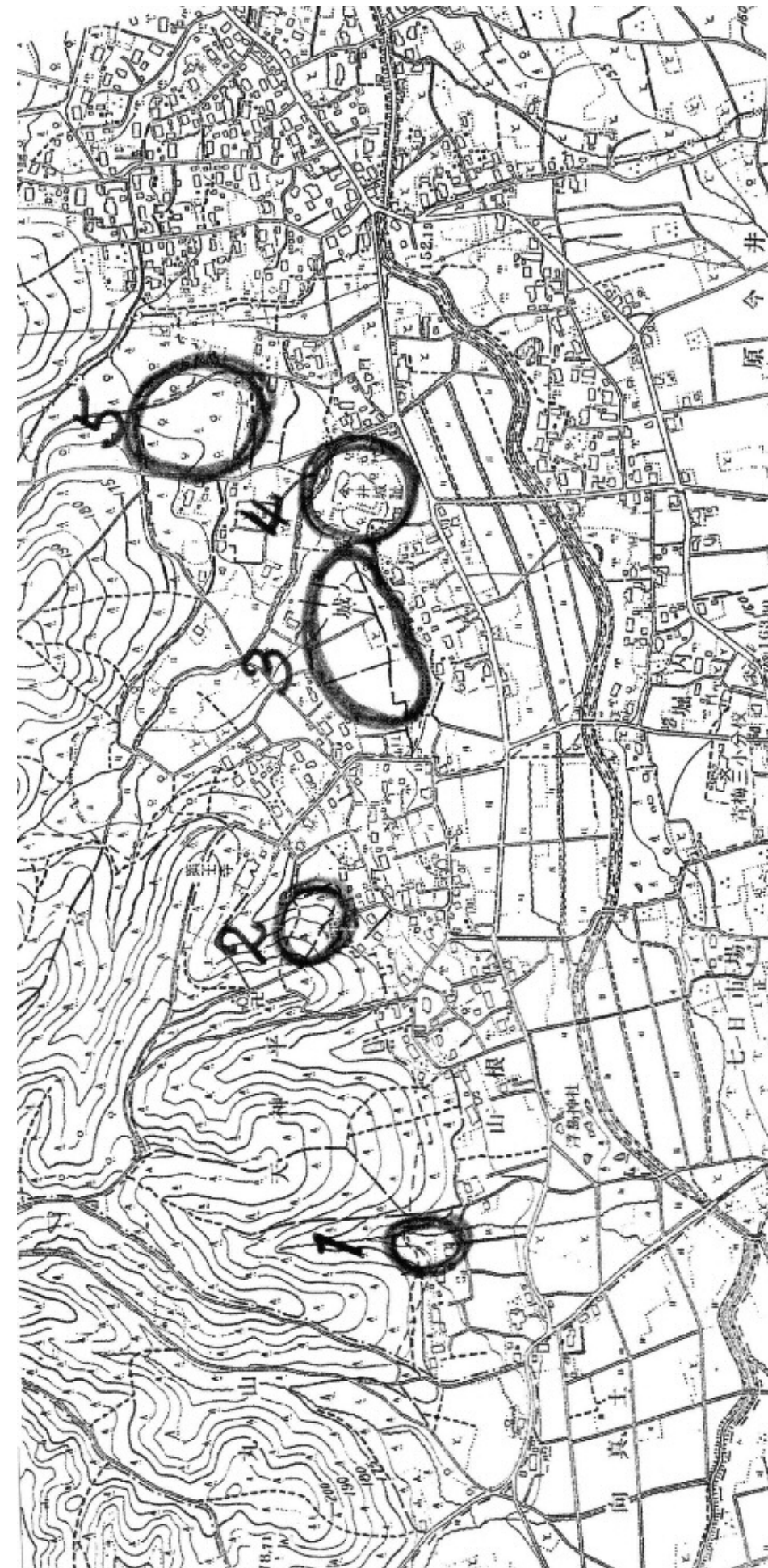
（続く） （文責・鈴木晴也）



ナイフ形石器

フレイク

城の腰遺跡出土



霞川地域の遺跡